



## 外部の専門家の活用

障害の特性が周囲に理解されなかったり、障害からくる困難な状況に対して適切な対応がなされないことで、二次的な問題として授業参加が難しくなったり、欠席や遅刻をしたりしがちになる可能性もあります。

障害の理解や支援内容の検討に際しては、管理職や特別支援教育コーディネーターをはじめとする周りの教師に相談するのはもちろん、医療関係や福祉関係、就労関係などの外部の専門家の知見も積極的に活用しましょう。（➡実践例 12）

### <外部の専門家の例>

#### ○医師（医療機関）：

医師は、子供の障害の程度や困難な状況の把握において、その子供の生育歴、現在の困難や課題、学校や家庭におけるこれまでの取組の状況などの情報を基に、医学的見地から助言をします。診断に限ることにはならず、子供に対する理解を深め、適切な指導・支援につなげるための相談にのることができます。

また、本人や保護者の障害の特性に関して、専門家として支援をすることもできます。

主治医の場合、子供の状況について、学校の先生から問い合わせをいただくことがありますが、個人情報なので、保護者の知らないところで子供のことをお伝えすることができません。相談いただく際には、原則として保護者に事前に確認してからご連絡ください。



#### ○作業療法士（医療機関、福祉機関、就労機関等）：

作業療法士は、子供の学校生活や学習状況について、実際に見たり、本人や教師、保護者などから話を聞いたりしながら、その子供の身体及び感覚の特徴や、理解したり判断したりする力について把握・分析し、困難や課題の要因は何かを探ります。そして、困難や課題の改善・克服のために、学習環境や活動内容の調整、道具の工夫、声のかけ方などについて提案をします。具体的には、楽器や文房具の操作が苦手である、友達と上手く遊べない、授業中の離席や離室が目立つなど、学校における様々な場面の相談にのることができます。

例えば、相談で話題にあがっている子供の課題について、どんな状況や場面で見られるのか、他の場面での様子はどうかなど、子供の普段の様子も含め、多くの情報を先生方からいただきながら、どうすれば子供が上手く行動できるのかを検討したいと思っています。



#### 参照

▶ 「「特別支援教育」における作業療法（OT）」（一般社団法人日本作業療法士協会HPより）